2025 年 3 月 31 日

2024 年度 ACL 研究報告

プロジェクト代表者氏名・所属： 福田大輔　総合文化政策学部教授
研究プロジェクト名称：ジャン＝フランソワ・リオタール研究（生誕 100 年を記念して）

個人的なトラブルから予定とは異なり、2024 年 9 月ではなく、2025 年 1 月末から 2 月初めのフランス滞在のためにプロジェクト研究費を費やした。研究費は書籍代と旅費に充てられた。下記が旅行の日程である。ここには記載していないが、25 日にはパリ第 8 大学精神分析研究科で特別講義を行なった（オンライン）。

1 月 24 日：羽田空港出発、パリ到着。
1 月 27 日から 2 月 7 日まで：フランス国立図書館にて文献調査、
2 月 5 日：パリ出発
2 月 6 日：羽田空港到着

パリに到着してから哲学専門の書店 Vrin に足を運んでみたが、リオタール生誕 100 周年に関するイベントは開催されなかったようで、それにまつわる研究書や雑誌なども発刊されていないことが判明した。同書店や他の書店でもリオタール作品は『ポストモダンの条件』（1979）以外は入手不可能になりつつあり、1998 年のリオタールの死去以来、この哲学者が急速に忘れられている現状が明らかになった。これは 2025 年の生誕 100 周年を記念して日仏で企画が進んでいるジャック・デリダとは非常に対照的な状況である。リオタールが忘却の縁に追いやられている状況は、10 年以上前からすでに顕著だったようで、今回入手できた雑誌 Revue Cité, no 45, Lyotard Politique, 2011 のなかでも複数の著者が「忘却」について証言していた。

いくつかの書店では古本のかたちで彼の著作を入手することができた。とりわけ、Revue L'Arc, Jean-François Lyotard, numéro 64, 1976 が読めるようになったのは重要だった。カトリーヌ・クレマンやアンドレ・グリーンといったフランスの精神分析関係者がリオタールの 70 年代の主著『リビドー経済』（1974）の出版にとりわけネガティヴな過剰反応を示していたことがわかった。とりわけ、グリーンはリオタールと友好的な関係を結んでいると考えていたので、頭ごなしに『リビドー経済』を否定していたのは意外だった。1990 年代にはリオタールがフランスの正統フロイト派の牙城であるフランス精神分析協会の機関誌（精神分析雑誌 Nouvelle Revue de Psychanalyse）に投稿して、フロイトの『ヒステリー研究』（1895）のエマ症例を情動（affecte）の概念を通じて読み解いており、フランス精神分析協会の重鎮

グリーンとは理論的に共通点が多いと見立てていたからである。

また、*Au juste*, Jean-François Lyotard, Jean-Loup Thébaud, Bourgois, 2006 のような対談集を手にいれることができたのも幸いだった。管見によれば、日本ではほとんど言及されていないが、この 1979 年の対談は、主張の重心となる点が把握できない！と批判されるリオタールの立ち位置を把握するうえで必須の文献だろう。とりわけ、この対談の後半部分で、キリスト教の愛の倫理の普遍性が検討されている。また、「レヴィナスの論理」（1978）では、ユダヤ教についての脱構築的な観点が垣間見られる（ちなみに、この発表が収録された『レヴィナスの倫理』は、2024 年 1 月に邦訳が出版されている。この点においては生誕 100 周年の企画は日本では存在していたことになる。松葉類という若いリオタール研究者が翻訳している点においても期待がもてる）。

2025 年 1 月末から 2 月初めの海外出張以外では、大学院の講義において『言説 形象』（1971）をフランス語で読解し、とりわけラカンの隠喩・換喩概念を批判している箇所を検討した。そこでは厳密な文献読解を展開するリオタールの手捌きを学生と確認した。まずは邦訳を検討し、そのあと原文にあたる講読の形式を採用したが、そのおかげでリオタールの文の構築から読み取れる、彼の知的な誠実さと論証の強力さを学生に伝達することができたと思う。

具体的には、フロイトが『夢解釈』（1900）で提示した歪曲（Entstellung）、圧縮（Verdichitung）、置換（Vershiebung）、形象可能性への考慮（Rücksicht auf Darstellbarkeit ）を現象学的な奥行きのある読解で捉え直す仕方、さらには、ヤコブソンの隠喩（métaphore）と換喩（métonymie）の捉え方のゆらぎ（失語症論とロシア詩論の文脈の違いに由来する）を指摘する仕方、どちらもきちんと単語の積み重ねを追って行くと、見事な論証となっていることがわかった。

リオタールはラカン批判については控えめであり、隠喩論については言語学ではなく修辞学に属するというバンヴェニストの言葉を引用するに留め、むしろ、フロイトとヤコブソンとラカンの議論の差異を際立たせ、ラカンの「父性隠喩」読解の独自性には触れていなかったが、『マルロー署名付き』（1996）や『聞こえない部屋：マルローの反美学』（1998）といった最晩年の著作における（M・クライン的な意味での）「悪い対象」としての母親の強調とともに検討する必要があるだろう。こうした著作については、*Rereading Jean-François Lyotard: Essays on His Later Works*, edited Heidi Bickis, Rob Shields, Routledge, 2019 などの参考文献もあるが、あらためて『言説 形象』（1971）、『リビドー経済』（1974）、『文の抗争』（1983）でのリオタールの精神分析概念の把握と付き合わせて読解する方がより実りのある成果を提示できると思われる。

今年度は、多分に文献学的な成果しか提示できなかったが、こうした文献をもとにしながら、引き続きリオタール読解を継続できれば幸いである。

福田大輔